

令和5年8月23日

清水町議会議長 山下清美様

清水町議会厚生文教常任委員会
委員長 川上均

所管事務調査について

常任委員会活動として行う所管事務調査について、このたび調査を終えたので、その結果を下記のとおり報告いたします。

記

1. 調査事項 清水高等学校への支援策の現状について
2. 調査期日 令和5年8月21日
3. 調査先 教育委員会学校教育課
清水高等学校振興会（清水高等学校）

4. 調査の結果

今年の高校入試で清水高等学校では3間口120名の定員に対し、2年連続定員割れとなった。道教委における公立高配置計画（案）では2026年度までは3学級が維持されるが、2027年度以降は予断を許さない状況にある。

そこで、現状の支援内容と今後の3間口を維持していくための課題を探るため、学校教育課と清水高等学校振興会理事である学校長との意見交換を行い、調査を実施した。

【学校教育課】

はじめに学校教育課職員より、十勝管内中学卒業者の推移と高校別入学状況、清水高校入学者の出身地別内訳、清水高等学校振興会への支援内容について資料を中心に説明を受けた。

町内の中学卒業者数は、令和5年で85名（管内2,823名）であり、今後令和12年には60名（同2,484名）となり、緩やかながら約8%（同12%）の減少が見込まれる。

令和5年度清水高校入学者67名の出身地別内訳では、清水町内の中学卒業生数85名の内29名（34%）、新得町から5名（6%）、芽室町から17名（20%）、帯広市から11名（13%）、学区外から5名（6%）となっている。

清水高校の定員割れの主な要因は、帯広市内の私立高校の一部が本年度も定員を上回る入学者を受け入れていること、さらに国や道の私立高等学校生への授業料負担軽減制度などにより自己負担が減少し、市内をはじめ町外から交通費と時間をかけて清水高校へ入学する生徒が本年度は大幅に減ったことが大きい。特に芽室町からの入学者は令和4年度38名から令和5年度17名と大幅に減少している。

そうした状況であるが、町と教育委員会による道教委への間口維持に向けての要請活動、スクールバスを活用して新得町屈足からの通学生確保や、振興会を通じた助成により、清水高校の魅力発信をするため学校紹介パンフレットを生徒の力を借りてより魅力的なものを作成したり、また学校紹介動画を作成するなど、新たな取り組みも進められているとの報告を受けた。

【清水高等学校振興会】

次に、清水高等学校振興会理事である学校長より、高校の概況について説明を受けた。

道内の令和5年度の総合学科の高校は私立1校を含め19校となっている。系列数は1～2間口校で3.2系列（平均開設科目数60.3）、3～4間口校で4系列（平均開設科目数88.2）となっているが、清水高校は令和5年度については4系列（平均開設科目数97）と充実している。しかし、今後の教員数の見通しは、令和5年度27名から令和6年度25名、令和7年度以降22名となり、総合学科としての魅力ある科目や系列数を維持できなくなる可能性がある。

そのような状況で新たな対応策として、高校卒業者については令和3年度以降、進学傾向が高まり進学希望者が就職希望者を上回っている現状から、進学チャレンジクラスからより生徒の自主性を重視した「進学チャレンジ生」へ転換し、進学チャレンジ生徒応援事業を新たに導入。振興会支援を活用して大学視察研修の実施や、定期的な模試受験など支援を強化している。その他には「総合的な探求の時間」を充実させるエナジード教材の導入、令和6年度からはCS（コミュニティースクール）を導入予定で、地域連携を強化し、教育資源を開発するとともに主体的な地域活動の推進を目指すなど、活動を拡大している。

また生徒を主体とする取り組みとして、一部厳しいと言われている校則の見直しや体験入学での生徒による説明なども取り入れている。

今後の課題としては、中学生の学校見学会の日程を中学校と協議して決めたり、先生の情報発信の工夫やアイスホッケーの支援強化が求められている。

【総括】

学校のプログラムと生徒が学びたいもののイメージの相違をどのように高校の中で築いていくのかとの問いに対しては、系列については生徒に聞いたことはないが、科目に関しては生徒が望む科目を設定することは考えられる、特に学校設定科目という手法があるので、各教科で生徒から聞いているとのことであった。

親のイメージを子供に伝えてもらうために、清水町外や町内の保護者への情報発信が必要であるとの意見については、毎週金曜日にFM-JAGAで生徒が出て高校のPRをしているが、町民への発信はなく、FM-JAGAのホームページとかインスタグラムには出しているとのことである。周知方法や時間帯の課題があり、インスタグラムやフェイスブックなどSNSの活用や、録音したものを各中学校の昼休みに放送するなどの取り組みをお願いしたい。

芽室からの入学者が多いがとの問いには、芽室も町内から進学する生徒が3割、4割ほどで、公共交通の利便性から清水から帯広の進学校に行き、その分帯広から芽室に来ている。さらにサッカーの有名校はトップの選手は枠があり、ただサッカーをやりたい生徒を呼び寄せている学校もある。逆に清水高校でサッカーを始めたという生徒もい

るとのことであった。

また、このままでは間口減となり大きな影響が懸念されるとの意見が出され、これについては2間口になると選択科目が一気に減り、魅力が下がり先生も減ることが懸念される。道教委からも生徒を集め間口維持するために具体的に何をするのかとの厳しい意見も出されているとのことである。

部活支援については今年度から予算面からも支援強化を図っていくとのことであるが、その中で、特にアイスホッケー一部に関してはバスの維持費や下宿代など、地方から来ている生徒たちの負担が大きく、このままでは減っていくのではと危惧しているとの意見に対し、今後の支援についての課題とした。

清水高校をもっと知るために高校関係者との意見交換は可能かについては、学校見学等を活用して地域の人たちに学校を訪ねていただくことは可能であり、地域参観日もあるので連絡いただければとのことであった。

全体を通して、町として清水高等学校振興会を通じて、昨年度から補助金を増額して支援を強め、清水高等学校も魅力を高める取り組みとして、振興会と協議しながら教育活動や部活動の充実や発信力の強化に前向きに取り組むという姿勢を鮮明にしている評価できる。

一方で、委員からも意見が出されていたが、女子アイスホッケー一部の創設を望む声も届いているとのことであり、全国的にも貴重なアイスホッケー部のある道立高校としての存在価値を再認識し、バスの支援や下宿の充実、遠征費の助成など全国から生徒を集めるための支援とPR強化を求めたい。また、進学傾向が高まっていることに鑑み、進学強化による地元や周辺自治体の中学生確保のためのさらなる支援と、CS導入による地域との連携・交流を通じ、地域とより一体となった高校支援の取り組みも望むところである。

本町の活性化にとって、清水高等学校の3間口維持と魅力化は課題であり、特色ある総合学科の質的向上を目指し、清水高等学校、高校振興会、行政だけではなく、町民も含めた町全体を挙げての清水高等学校の前進に向けて、更なる取り組みを望むものである。

以上、厚生文教常任委員会の所管事務調査の報告とする。